
エクストライバー Gear

樋山翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクストライバー G e a r

【Nコード】

N 1 1 9 1 T

【作者名】

樋山翼

【あらすじ】

ある装置によつて、A Iカー暴走がなくなり、エクストライバーにも平凡な毎日が訪れていたある日。テロリスト集団の連合「アリゲーター・フェデレーション」が起こした脱獄劇が起こった。そして、脱獄した人物の中に「当麻」という人物の名前があった。その当麻は、数年前にエクストライバーの東京支部の二ナ・アンナ・サnderと風間レイが捕まえた人物であった。その直後「アリゲーター」が人為的に暴走させたA Iカーが暴走したとの知らせが入り、エクストライバー達は暴走を制止しに行くが・・・

この物語は原作から2ヶ月後の世界を描いた小説です。小説を書くのは初めてなので、文章がメチャクチャなところがありますが、ご了承ください。

【追記】現在、受験勉強により2012年の3月まで小説の更新ができません。ご了承ください

プロローグ エイリアン編 その1（前書き）

後付けですが、あまりにもこの小説の説明が不十分だったので書きました。

文字数が多いので、二つに分けて書こうと思います
設定は一部、自分で作った所もあるので

原作とは違うところもありますが、ご了承ください

ブローグ エイリアン編 その1

2099年10月1日

「あと二ヶ月で22世紀を迎えようとしている日本

リアモーターカーや自律航行システム搭載の自動車「Aエーカー」、超音速旅客機などが導入され

99年前より遙かに交通の便に困らなくなった時代になった

のはいいのだが・・・

自律化されたら当然運転は機械が操縦するわけで、機械だから当然故障もする

リアモーターカーや旅客機は技術が進歩し、故障やバグは少なくなっただが

なぜかAエーカーはバグや故障の為の暴走が非常に多い

その理由はバカな自動車メーカーが飛行機メーカーなどに遅れたくないが為に

まだ技術の未熟な航行システムを国に必死こいて圧力をかけ導入した為といわれている

だが国もただでは導入しない、故障による暴走を食い止める為に従来の人の手で運転するレシプロカーで暴走を止めるエクストライバーと言う部署を作った

そして導入するように圧力をかけられたほかの国も同様の対処をし、ポンコツなAIカーは日本から世界中に導入された

だが当然、ごり押しで導入したポンコツなAIカーの問題点があまりにも多いと言う声も上がったが

馬鹿な自動車メーカーのお家芸である圧力でなかったことにした

そんなことを知らないマヌケな一部の一般市民は自分で運転しなくても済む最先端の車と勘違いし

AIカーは大普及。運転の醍醐味を知らない人間が増え

自分で運転するという考えは当の昔に忘れ去られた

だが右左曲折あり、エクストライバーへの妨害行為で服役中であったエクストライバーの元オペレーターだった当麻と言う男（某漫画の主人公で不幸でおなじみのあの人ではない）が考案した

自律航行システム「Toma AutoPilot System（TAPS）」が採用され暴走は減少

世界中のAIカーにTAPSを導入した二ヶ月の間に世界中のAIカーの暴走は0という結果を残した

その結果、エクストライバーは御役御免のような形になり、仕事が激減

ある情報ではエクストライバー廃止の動きも出ているというらしい・

まあ、この話は置いておいて、ここは首都高速道路湾岸線

10年前くらいに大規模な車線拡張が行われ、今は片側4車線となっている

4車線だから、かなりぶつ飛ばしやすいし、かなり快適。

しかも今は深夜の2:00だから、全然車も居ない、だから250km以上で走っても問題ナッシングって訳

・・・ってか、俺、独り言激しくねえか？異動が決まってから

どうもテンションがおかしいんだよなあ、傍から見るとキチ。イ

に見られるな・・・

まず俺は誰と喋ってるんだ？頭の中に誰か住み着いたとか勘弁してくれよ」

独り言をつぶやき、フルチューニングされた赤のFD3S型のRX-7で湾岸線を走る赤髪の青年

すでにFDのメーターは250kmを超え、300kmを振り切っている

だが300kmを超えるスピードで走っているのにも関わらず

独り言を激しく言うほど余裕な素振りは異常としか言いようがない

「あの東京支部に配属されるってなったら、キチ。イみてえに走れるぐらいじゃねえとな

ナメられたら困るし、俺は「エイリアン」って言われてるぐらいだから

名前負けしないように頑張るしかねえか」

彼には「エイリアン」という異名がある、その由来は

あまりにもドライビングテクニックが人間離れしていることから付けられた名前だが

それは本人に説明するための建前、本当の理由は彼の素行に由来する彼は未成年ながら前科があり、喫煙や問題行動や命令を無視するのは当たり前

ムカついたら女であろうが関係なくボコボコに殴るなど

奇行じみているその人間離れしているとんでもない素行から

「エイリアン」というレッテル同然の不名誉な異名を名づけられたという

だが本人は、まったくその事に気づいていないため

「エイリアン」という不名誉な異名を気に入っているようである

「まったく、そもそもあんなクソ野郎どもを半殺しにしただけで異動とかふざけんなよ、

まず裏金とか貰うほうが悪いんだつつの！

俺はまだいいが、なんであの2人も責任を取らされるんだよ！」

青年はかなり腹がたっているようで、そういいながらハンドルをバシと叩く

「今、親父が居たら俺の人生も変わってただろうな・・・

親父が居たら、こんなクズな人生にはならなかったのか・・・？

どうなんだよ・・・親父・・・」

「この先、東京湾アクアラインです」

いかにも棒読みな口調で助手席に設置しているナビゲーションシステムが空気を読まずに案内するが・・・

「そうか、ならお前は御役御免だな」

と、ナビゲーションシステムの電源を切ってしまった

「10km以上あったら十分だな・・・」

親父、今からこいつで問いかけるから、ちゃんと答えてくれよ」

そう彼は言い、ハンドルにある「NOS」と書かれた赤いボタンを押した

どうやら二トロを噴射するボタンのようだ

するとFDはものすごい勢いで加速を始めた

「親父、あんたの出来なかったこと、ここで叶えてやるよ

350、出してやるよ」

—— 彼が叶えること、それはFDで350kmを出すことであつた

—— 彼が乗っているFDは元々、彼の父親の愛車であつた

彼の父親はエクストライバーで、そのFDは父親がエクストライバーになつた時から乗っていた愛車

だが、彼の父親が事故死し、そのFDは彼の物になつたが、父親が亡くなつてから彼の人生は一変した

彼は父親への気持ちをぶつけるが如く、FDに金と人生を注ぎ込んだ

—— 350 超えて死ねたら本望だ ——

彼はそれほどFDに何もかも注ぎ込んでいた

「早く350来いよ！待ちくたびれて仕方ねえんだよ！」

すでにFDは340kmに達しようとしている

二トロの効果が切れ、加速が弱まったときに彼はもう一回ボタンを押した。

すると、先ほどの二トロを噴射した時よりさらに加速し始めた。すでに340kmに到達している

「よし！いいぞFD！350も夢じゃねえぞ！」

FDは刻々と速度を上げていった

345km、346km、347km、348km・・・

そして349kmに達しようとしていた

「頼む！頼む！親父・・・頼むよ！」

彼は必死に祈り続けた。

「ずっとこのFDに何もかも注ぎ込んだんだ・・・なんとしても349を越えたい・・・！」

そう彼は祈り、祈り続けた

そして遂に349kmに達した・・・

「くるぞ！くるぞ！あ・・・あ・・・あと、あと1・・・1km・・・あと1km・・・うっ・・・うっ・・・」

彼は泣きながら懇願した

——349km——

それは父親が事故死するレースで事故死の原因になる事故が起こる直前に出した最高速度であった

349と言う文字も「4（死）」と「9（苦）」という不幸な字が二つも入っているが

彼の人生もそうだった

父親が死に、彼の人生はまさにメチャクチャになった

彼の脳裏には言葉では語れない、惨い過去や投げかけられたつらい言葉がフラッシュバックしていた

——悪魔の子だわ、近寄っちゃだめよ——

——てめえなんて死んでも、誰も悲しまねんだよ——

——この人殺しが——

——やつ・・・やめろ・・・近づくなああ！——

「もう、350超えて死んでも悔いはないな・・・

俺が死んでも、誰も悲しまない・・・所詮俺は人間の屑だよ・・・」

そう彼は語りながら、三回目の二ト口の噴射をしようとした、その時

——お兄ちゃんもうやめて！——

脳裏に浮かんだその言葉で、二ト口を押すボタンから彼の指が離れてゆく

同時にアクセルに最大まで踏み込んだ足も離れてゆく

「あ．．．．．ああ．．．．．」

彼は氣を失ってしまった

——お兄ちゃん、そんなことやめて——

「ああ．．．．．」

彼は涙を流していた

どうやら彼は氣を取り戻したようだ

「ん．．．なんだここは．．．俺、死んじまったのか？」

アクアラインで走っていたはずのFDは駐車場のような場所に止まっていた

「どっなんだよ、こっ」

するとコンコンとFDのサイドガラスを小突く音が聞こえた

「誰だよ・・・」

そう彼はサイドガラスを開けると、ツインテールの少女が立っていた

次回につづく

プロローグ エイリアン編 その1（後書き）

とりあえず、オリキャラの話を書いてみました

いろいろ訳ありというキャラなんですが、300km以上出して失神とかw

結構無茶な話ですが許してくださいw

一ヶ月半書いていなかったのは、

実はこのプロローグの展開に悩んでいたのも原因です（爆）

楽しみにしててくださいった皆様、本当にすみませんでしたorz

プロローグ エイリアン編 その2（前書き）

【訂正】エイリアン編その2で、別の話に入れる予定の台詞が入ってしまいましたので、訂正しました。

読者さんの皆様には深くお詫びを申し上げると共に、この様なことがないように文章の見直しを徹底するように努力します。

本当に申し訳ございませんでした

プロローグ エイリアン編 その2

「なんだお前か」

ゴスロリファッションに身を包んだ高校生くらいのツインテールの少女

彼は少女が誰かと言うことをすぐ認識した

彼がサイドガラスを開けた直後

パチン！

その音と同時にいきなり彼の頬に衝撃が走った

彼は頬に走った衝撃の原因と理由を即座に理解した

「なんだじゃないわよ！あんたいい加減にしなよ！もうすぐで死ぬところだったんだよ！」

「え？」

「え？じゃないわよ！私とあんたがサービスエリアで休憩してて、それでちよつと私が目を離したらあんたが突然居なくなっ

どこに居るのかって東京中探してたんだから！」

「マジかよ・・・」

「そしたら、本部から連絡があつてアクアラインに行ったら、

あんたが気を失つた状態で高速道路のど真ん中で止まってて、

あんたのせいで道は大渋滞、なんとかレッカーで牽引してもらつて
抜け出したけど、

高速道路のど真ん中で止まるなんて自殺行為にもほどがあるわよ！」

「その時は気を失つてたんだ・・・本当にすまない・・・」

「すまないじゃないわよ！私がどれだけ怒られたか！

しかも配属してすぐよ！？面子もクソもないわよ！

もしかして、また350km出そうとしてたの!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

核心を突かれてしまい、彼は黙ってしまった

そうすると、先ほどまで怒りに震えていた少女が彼の心境を察し、
暗い表情で語る

「やっぱりそうなのね・・・でもそんな無茶なことしちゃ駄目だよ、

あんたが死んだら、私たちどうすることも出来ないじゃない・・・」

「あんたが居るから、私たちは無事だったのよ？」

「そんなことねえよ、まず異動になったのも全部俺のせいだ

しかもお前の面子もズタボロにしてしまった・・・俺はクズだよ・・・
本当に・・・」

「あんたはクズなんかじゃないよ、私があんなひどいことされそう
になったのを

あんたは身を呈して私を守ってくれたし」

「もうその話はすんな、あいつらを思い出ただけでムカついてく
る・・・」

「そうね・・・ごめんね、あんなに怒っちゃって」

「キレるのも無理はねえよ、俺がお前の立場だったらぶっ殺してる
ぐらいだ、本当にすまない」

「いいよ、でもひとつだけ約束してくれる？」

「なんだ？金か？」

「そんなことじゃないよ」

「んじゃ、なんだよ？」

「今から言つよ、ちゃんと聞いてね」

「絶対、事故死しないでね」

その言葉を聞いた瞬間、
「エイリアン」と呼ばれるほど非人間的な
彼が

一筋の涙を流していた

「ごめんね……やっぱり駄目……かな……？」

「いや、そういうことじゃないんだ」

「無理強いはしないよ、嫌なら嫌でいいし・・・ちよつと言いきすぎだったかな・・・」

「だからそうじゃないんだって・・・」

「あんた・・・ずっとこのFDに注ぎ込んできたからね・・・そりゃ、その位の気持ちにもなるよね・・・」

「あんたの事、なにも分かってあげられなくて、本当にごめんね・・・」

「いや・・・その・・・」

「いろんな人にいやな事言われて、つらかったよね・・・」

あの時も身体を張って私たちを守ってくれたのに、

私は怒ってばかり・・・人間として出来てないよね・・・私こそ人間のクズだよ・・・」

少女は泣くのを我慢し、目を潤ませていた

「だから・・・」

「さっきの言葉、やっぱり忘れて・・・アクアラインの件は全部私が責任を・・・」

その言葉を聞いた瞬間、彼はFDから降り、少女の服の胸倉を掴んだ
彼は少女の服の胸倉を掴み、こう叫んだ

「てめえいい加減にしろよ！それ以上言つとぶつ殺すぞ！」

彼の目は真っ赤になっていて、大粒の涙を流していた

「誰がそんな事言つていいつて言つた！？てめえは何も悪くないつ
つてんじゃねえかよ！」

「え……？」

「てめえは人間のクズなんかじゃねえし、人間として出来てない訳
ないし

「道のど真ん中で気を失つて俺を助けてくれた恩人はどのどい
つだよ！？

正直、死ぬなつて言つてくれて嬉しかったんだよ！

いろんなクソ達に死ぬ死ぬ言われ続けた俺にとつてはな！

まったく、こんなこと言わせんなよ……恥ずかしい……」

「あんた……」

すると、彼は少女の胸倉に掴んでいた手を離し、少女を思いつきり
抱きしめた

ゴスロリ少女を抱きしめる赤髪の青年

「素直になってくれて、ありがとう」

「う、うるせえ・・・」

「・・・というか、ここ何処なんだよ」

次回につづく

ブログ エイリアン編 その3（前書き）

投稿遅れてすみません・・・orz
やっとブログ3話目できました・・・
今回でエイリアン編は完結と書きましたが、続くようです・・・す
みませんorz

プロローグ エイリアン編 その3

「・・・というか、ここ何処なんだよ」

赤髪の青年が、ゴスロリファッションに身を包んだツインテールの少女を抱きしめながら言った

「あそこに行けば分かると思う」

少女が彼の腕を放し、ある場所に指を指した

「だから、教えてくれよ・・・」

彼はそう小声で文句を言いながら、少女と共に彼女が指を指した場所に向かう

「ん・・・？ここ海のだ真ん中じゃねえかよ」

彼の目線の先には海が広がっていた、その海のだ真ん中に橋と駐車場らしき施設が視界に広がっている

「なんだここ？人工島かなにかか？」

「ヒント出してあげる！さっきまで走ってたところに近い場所よ」

「ヒントじゃなくてちゃんと教えてくれよ・・・」

「ヒント出してあげたんだから、そのくらい分かるでしょ？」

「あーアレだろ？アレ・・・アレだよ」

「あれじゃわかんないよ、はっきり言ってくれなきゃ」

「分かったよ、あれだろ？答えは・・・」

キイイイイイ！

彼が質問に答えようとしたし瞬間、彼らが居る駐車場らしき場所に
スキール音が鳴り響いた

「なんだよこの音、うるせえなあ」

「早く答え言つてよ」

「だから答えは・・・」

キイイイイイイイ！

「なんだよ全く！誰だよここでドリフトしてる奴は！」

「うるさいわね、まあ気を取り直して答えてね」

「分かった、答えは・・・」

ギイイイイイイイイ！

「うるせえつつつてんだろ！頭にきた、ちょっと待ってる」

「ちょっと！なにしに行くのよ！」

「仏の顔も三度までつーだろ？だからこのクツソうるせえ音を鳴らしてるバカの車をだな・・・」

彼はズボンのポケットから何かを出そうとした

「何しようとしてるの？」

「これでぶち抜くんだよ」

ズボンのポケットから出された物を見た瞬間、彼女は驚愕した

「ちょっとあんた！？そんな事したらクビになるって！」

なぜなら、彼が取り出したものは任務でいつも使用しているデザートイーグルという銃であったからだ

「デザートイーグルでぶち抜くぐらい、たいしたことねえだろ」

「はあ！？たいしたことくないわよ！まさかそれ実弾じゃないでしょうね！？」

「正解、お前の勘鋭いな」

「やめてよそんなこと！そんなことしたら元もこつもないじゃない！」

「まあ、タイヤに一発当てるぐらいだから大丈夫だろ」

「本当にやめてよ！事故でもしたらどうするのよ！」

ブオオオオオオオン

レシプロカーのエンジン音が響いた瞬間、少女の忠告を無視し、彼は銃を構えた

「あんたいい加減にしなよ！そんなことしても意味無いって！」

「うるせえ！お前は黙ってみてろ」

徐々にエンジン音とスキール音が近づいてくると彼の表情も険しくなる

「早く出て来いよ、ぶち抜いてやつから」

そして、エンジン音とスキール音がさらに近づいてきた

「お前も度胸あるな、んじゃそっちに行つてやるよ」

少女が必死にやめたと叫んでいるが、彼は聞く耳すら持たない

それどころか、彼は銃を構えながら、駐車場らしき場所の入り口に向かって歩き始めている

そしてエンジン音が彼らの場所まで最大に近づいたその時……

出てきた車は、青のZ33型のフェアレディZであった

「なんだよ、あいつかよ」

彼には見覚えがあつたようで、銃を下ろしたのはいいのだが……

そのZは彼の居る方向へアクセル全快で向かってきている

「どういつこつたよ、チキンレースでもする気か？ やってやるうじやねえか」

彼はそう言いながら微笑み、その場所から動かないでいた

Zもその呼びかけに呼びかけるかの如く、全力疾走で彼が居る場所に向かっている

「あいつどうせビビりだから、すぐ止まるんだろっな」

だが彼の言葉とは裏腹に、Zは速度をどんどん上げていつている

「マジかよ、あいつも根性あるな……」

「普通に考えたら、そこがブレーキポイントなんじゃねえのか？ ギリギリまで寄せる気か？」

Ｚは彼の考えているブレーキポイントを普通に越え、彼の元まで走行している

「おいおい、冗談も大概にしろよな」

彼がそうつぶやいている間にもどんどんＺは彼の居る場所まで近づいている

「あんた早く逃げて！」

少女が彼にそう叫んだが、彼は言い放った

「なんで逃げる必要があんだよ、どうせ止まるって」

「あのＺ、ブレーキが効いてないのよ！」

「はあ！？効いてないだと！？」

彼が少女に振り向き、そう言い彼がＺの居る方向に視線を戻すと、

彼の約3mぐらい前にＺが近づいていた

「おいおいおいおい！ふざけんなよ！」

彼は叫びながらそばにあった柱まで飛び込み、間一髪Ｚから避けた

「ブレーキが効いてなかったら無理にでも止めるしかねえじゃねえかよ！」

彼は素晴らしい、Zのタイヤに向かってデザートイーグルの引き金を引いた

弾はタイヤに命中し、弾の中からはき捨てられたガムのような粘着状の物質がタイヤに付着した

するとZは減速し始め、駐車場らしき場所の壁からギリギリの場所に停車した

停車した直後、Zのドアが開き、ニット帽を被った金髪の青年が倒れこむようにZから降りた

「はぁ・・・怖かった・・・死なずに済んでよかった・・・」

素晴らしいながら疲労と安堵が混ざったような表情をする青年

青年がZに持たれかけながらうつむきながら座っていると

いきなり何者かが青年のTシャツの胸倉を掴んで青年の顔を掴んだ

「おい・・・・・・・・てめえ・・・・・・・・」

そこには赤髪の青年が噴火寸前の火山の様な表情をしていた

「あつ・・・・・・・・あつ・・・・・・・・その・・・・・・・・」

「ふざけんじゃねえぞこの野郎！」

彼は青年の顔に向かいパンチを一発見舞った

「てめえ、俺をぶつ殺す気か！？轢き殺す気か！？ああん！？」

「ごめん！ブレーキが効かなかったんだよ！本当にごめん！」

「ブレーキのメンテナンスぐらい、出発する前にちゃんしとけよ！」

「ちゃんとメンテはしたんだけど、ドリフトしてたら効かなくなっ
たんだよ、許してくれ頼む！」

「調子抜かしてんじゃねえぞこの野郎！事故つたらどうするつもり
だったんだよ！」

言い合っている二人を見ていた少女はあきれながら言った

「まったく、あんた達は本当にバカね！」

「そもそも最高速用のセッティングでドリフトする事がおかしいで
しょ！？」

「本当にバカコンビなんだから・・・あんた達・・・まったく、冷
や冷やしたじゃないの・・・」

少女は顔を赤らめながら二人にそっぽを向いた

「ごめん心配掛けちゃって・・・って何処行つてたんだよ！
？俺、東京中探してたんだぞ！？」

「アクアラインで気失って、いつの間にかここに居た・・・という
か、ここ何処なんだよ・・・」

「ここって海ほたるか？」

「ああ・・・ってここ海ほたるかよ!？」

「え、あんたここ何処だか知らなかったの!？」

「え?い・・・いや、間違ってないか聞いたただけだ、聞いただけ・・・」

「ふーん、知ったかぶりしてたんだー」

そっぽを向いていた少女はふたりの方を向き、小悪魔のような笑顔を見せながら

赤髪の青年に向かっていじわるそうに言った

「知ったかぶりじゃねえよ!本当に知ってたんだって!」

「まあ、気にしても無駄よねえ」

またもや少女はいじわるそうに言った

「てめえなあ・・・FDで轢いてやろうか・・・」

「あ、そういえばそのFD、エンジンブローしてて動かないわよ」

「は?ブロー?どういうことだよ」

「そりゃ、349kmまで無理やり走らせたら、ブローするのは当たり前でしょ?」

「ふざけんなよ！それじゃ、どうやって俺は新しい支部まで行けばいいんだよ！？」

「もうすぐ東京支部の整備員さんがレッカーで来てくれるらしいから、ＡＩカーで帰るしかないんじゃない？」

「あんな欠陥自動車乗れるわけねえだろ！お前は乗せてくれねえのかよ！」

「いやよ、そんなの！だってあんた私の車の事、狭いから嫌って言うてたじゃない！」

「なんだよお前・・・」

「もういいじゃん、もういつそのことレッカーで一緒に行ったらいいじゃない」

「はあ！？ふざけんじゃねえぞ！」

「しょうがないわね・・・文句言わないなら乗せてあげてもいいわよ」

「分かったよ、しょうがねえなあ」

「んで、俺はどうしたらいいんだよ？」

「あんたはレッカー来るまで待つてなさいよ」

「ええええ！？なんでだよ！？」

「私の車は二人乗りだし、誰も居ない状態でZとFD置いていくわけにもいかないでしょ？」

「んじゃ、私達は支部に向かうから、あんたはレッカー来るまでそこに居なさいよ」

「はいはい、どうせ俺は監視役ですよー」

「そうやってスネないの！しょうがないじゃない！」

「はぁ・・・わかったよ・・・」

「んじゃね、着いたら連絡するから」

少女はそう言い残し、「エイリアン」と共に金髪の青年の元を去った

次回につづく・・・

ブログ エイリアン編 その3（後書き）

今回は新キャラがまた一人登場しましたw

一応メインキャラなのですが、扱いがwww

まあそれは置いておいて・・・お知らせがあるのですが・・・

私は今年受験生なので、受験勉強の為に4話目はさらに投稿が遅れると思います・・・

本当にすみませんorz

受験いやだああああ（絶望

プロローグ エイリアン編 その4（前書き）

小説を書くのを休止していましたが、プロローグだけは完成させようと思い

ちよこちよこ書いていたら完成したのでうpしてみましたw
これで一応エイリアン編は完結です

プロローグ エイリアン編 その4

「暑いな・・・それにしてもずいぶん歩いたな、んであの車はどこにあんだよ」

少女と赤髪の男は先程居た場所より離れ、海ほたるの外にある駐車スペースを歩いていた

時刻は赤髪の男が走っていた深夜の2時を越え、朝の6時になっていた

この日は早朝ながらかなり暑く、長袖のジャケットを着ていた赤髪の男はかなり汗をかいていた

「もうすぐよ、あんた最近歩いてないから、弛んでんじゃないの？」

「うるせえ、余計な事を言っくなよまったく・・・」

「あ、あそこ」

少女が指を指している場所を見ると

ポツンと駐車スペースの片隅に停まっている白のNSXが彼の視界に入った

ただでさえ白いNSXは太陽の光でまぶしいほど白く光っていた

「本当にお前のNSXは目立つよなあ・・・ゆで卵の白身みたいだな」

「何それ・・・初めて聞いたわよ、そんな例え」

少女は苦笑いしながらNSXのドアロックを解除し、車内に乗り込んだ

「もたもたしないで、あんたも早く乗りなさいよ」

「せかつちだなあ、お前は・・・」

彼はそう小声で言いながら、助手席に乗り込んだ

「それじゃ、行くわよ」

「ああ、頼むわ」

少女がエンジンを掛けると

車内にあるオーディオプレイヤーに、ロック調な音楽が流れてきた

「お前、ロックなんて聞くんだ」

「うん、ちょっとはね」

「お前のいつも聞いている曲ってアニメソングとかだから、ちょっと意外だわ」

「今の音楽なんて、インストウルメンタルばっかじゃないのさ」

「まあ世間の流れつつうものもあるから仕方ねえよ、今の時代は情

報統制とかされてんだから」

「ちょっと反骨的な曲作っただけで逮捕だもんなあ・・・本当にクソだわ、今の時代」

「そうね・・・なんか嫌な世の中よねえ、本当」

「ああ、なんか思い出したら腹が立ってきた・・・なあ、なんか食いに行かねえか？」

「あんたさーいつも腹立ったらヤケ食いしてるけど、身体に毒よ？」

「うるせえ、俺は生きたいように生きるんだよ、人の勝手だろんなもんよー」

「人の人生をとにかく言えるような立場じゃないけどさ、ヤケ食いだ、全部私が払ってるんですけど」

「まあ・・・きょ・・・今日は払うから・・・大丈夫・・・大丈夫・・・」

「毎回払う払うって言うてるけどさ、それが今までのツケに・・・」

「もういいじゃねえかよー」

「よくないし、去年からのツケが合計で3万5000クレジット、いつ払うのよ」

「もう分かったよ！しょうがねえなあ・・・」

彼は少女にクレジットカードのような物を渡した

「これでいいんだろ？今日はお前も食っていいから・・・」

「え！？いいの！？本当に！？」

「ああ・・・もういいよ、今日はさ・・・世話になったし・・・」

「（「」うでも言わなきゃずっと言うからなあ・・・ああ・・・金が・・・）」

彼にとつては苦渋の選択であつたが、少女の気を物に集中させようという作戦に出たようである

「やったあ！何処でもいいの！？」

「ああ・・・よっぽど高くなかつたらな・・・」

「よっしゃあ！テンション上がってきたよー！そういえばテレビで美味しいイタリアンレストランがあるって・・・」

「（よくよく考えてみれば、6時から開いてる店なんてありやしねえか・・・）」

「（しかもイタリアンだなんてよ・・・開いてるわけねえよ・・・）」

「（まあ無かつたら適当にファーストフードの店に誘導させるか・・・」

・」

彼はそんなことを思いながら、助手席のガラスを見つめながらため息をついた

「ついたよ!」

「早っ!……って開いてんのか?」

「まあわかんないけどさ、しばらく歩くと思うけど……さあ行くっ!」

「はぁ……」

彼はものすごく絶望に打ちひしがれた様子でNSXから降りるが

その彼とは対照的に少女はものすごく幸せそうな顔でNSXから降りる

しばらくレストランに向かい歩いていると彼がこう呟いた

「高層ビルばかりだ……さすが東京ね……」

「なんか複雑よね、私達が東京に居るなんてさ……」

「ああ、まったくその通りだ……」

「あんた昔東京に住んでたんでしょ? あんたのお父さんの配属していた支部の関係でさ」

「5歳までちよつとだけな、あれからいろいろあつたもんだ」

「私とはえらい違い、私のお父さんなんてA Iカー作ってるキャロットモーターズの平社員よ?」

「別にいいじゃねえかよ、平凡で」

「平凡って・・・あんたの人生って波乱万丈っていうかなんていうか・・・」

「人の人生つてのはいろんな人生があんだよ、俺は他のと比べたらまだ大したことねえよ」

「そうね・・・あんた、まだ17だしね」

「お前もだろうがよ!」

「私はまだ16よ!12月で17だけどさ!」

「そついえばそうだったな」

「まったくもう・・・少しは気を使ってよね!」

「ああ、すまんすまん」

「本当にもう・・・・・・あ、あそこにあるよ!開いてるかな?」

「どうせ開いてねえよ、こんな時間だし・・・」

ガチャ！

「いらつしゃいませー！」

「・・・・・・・・・・」

「おタバコは吸われますか？」

「いいえ、吸いません」

「こちらへどうぞ」

「やっぱり開いてたじゃん！さーて何頼もうかなー」

「・・・・・・・・・・」

席に着くと、彼は青ざめた顔でズボンのポケットからタバコを取り出して吸い始めた

「結構人居るね、さすがテレビ効果・・・ってなんでタバコ吸ってるのよ！」

「いいじゃねえかよ、誰のおごりだと思ってるんだよ」

「ここ禁煙席よ！ダメだって吸っちゃ！」

「いいだろうがよ、バレなきゃ大丈夫大丈夫」

「バレるバレないの問題じゃなくて、吸っちゃダメだって！他のお客さんも居るんだから！」

「わかったようっせえなあ・・・」

彼は嫌々ながらもポケットから携帯灰皿を出し、タバコの火を消した

「んで、なに頼むんだよ」

「えーっとちよっと待ってねーえーっと」

「早く選べよ・・・ったくよ・・・」

「うるさいなあ、いろいろあって悩むのよ」

「さっさと選べよさっさと・・・」

「あ、これにしようかな」

「なんだよそれ・・・ってロブスター!？」

「そつよ、駄目・・・かな?」

「2000クレジットか・・・しょうがねえなあ・・・」

「

「え、いいの!？」

「・・・好きにしろ・・・」

「(やべえ・・・金が・・・)」

彼はそう思いながら、手が震えている中コーヒーを一口飲む

「ねえねえ」

「んだよお前よ・・・」

「ピザもいい？」

「ピ・・・ピザだと!？」

「うん、ピザ」

「・・・んじゃピザとロブスターでいいな？」

「それでいいよ、あんたはなににすんの？」

「コーヒーでいい・・・」

ヤケ食いだつたはずがまさかの方向に向かってしまい

愕然としている彼をよそ目に少女は店員を呼んだ

「はい、なんでしょうか？」

「注文したいんですけど」

「はい、かしこまりました」

「まずこれとこれとこれとこれと・・・」

「（おいおいおいおい、ロブスターとピザだけだったんじゃないのかよ・・・）」

「これとこれとアイスコーヒーで」

「ご注文は以上で宜しいでしょうか？」

「はい、以上で」

「かしこまりました」

「はぁ・・・頼む過ぎちゃった・・・」

「おい、お前」

「ん？なに？」

「俺はロブスターとピザでいいよなっつったよな？」

「うん」

「そんでさ、今さ明らかに5品以上頼んでたよな？」

「あ、そうだったっけ？」

「そうだったっけて・・・そうだよ！」

「あっちゃぁ・・・ごめんごめん、ピザとロブスター以外は自分で払うからさぁ」

「お前なあ……」

「お客様、お待ちしました。カマンベールピザとロブスターとペペロンチーノと……」

テーブルにはこれでもかと言うほどテーブルに料理が置かれる

「（おいおい、マジかよ……こいつそんだけ金払えるのか？）」

彼は内心そうおもいながらドン引きした様子で見守る

「ご注文の程は以上でよろしいでしょうか？」

「はい、以上で」

「かしこまりました」

「よし、食べるぞー！」

「おいおい、ゆっくり食べるよ……」

「だって美味しいんだもん」

「美味かったら滅多に食べれるもんじゃねえから味わって食べるよ・
・・」

「もつづるさいなあ……」

「そつえば、どつかのテロリスト集団による脱走劇がいろんな所で起こってるらしいんだが」

「あれって正直どうなんだよ」

「確かアリゲーター・フェデレーションっていう名前のところだったっけ？」

「あそこってＡＩカーテロっていうの考えてるらしいよ・・・」

「え、何それは・・・」

「詳しくは分からないけどテロの考えはこうだと思う」

彼女が大量にある料理を食べながら話をする

「人工的にＡＩカーを暴走させて、混乱させている間に脅しをかけて支配する」

「地区的に言えば、東京から攻めてそこから各地に飛び火させるっていう感じかも」

「そんじゃ東京支部の俺達がそれを抑止しないと行けないんだよな、責任あるな・・・」

「でも、人工的に暴走させるって言う事は出来るのか？」

「その抑制方法を私達が知ってるわけじゃない」

「ああ、あの方法か、あれって俺達しか知らねえじゃねえかよ」

「確かに・・・飛び火した時の影響が怖いわね・・・」

「そうだな・・・ってお前もっ食い終わってるし・・・」

「あ、食べきっちゃった！話すると食べきるの早いね」

「それじゃ、帰ろっか」

「ああ、そうするか・・・」

「すみません、お会計のほうお願いします」

「合計で2万6500クレジットです」

「これをお願いします」

彼女は財布からクレジットカードのようなものを店員に差し出す

「すみませんお客様、代金が足りないのですが・・・」

「え！？足りない！？これで全財産よ！？」

「おいおい、皿洗いだけは勘弁な」

「おい、お前らー」

そこには、海ほたるに居たはずのニット帽の青年が二人の前に立っていた

「なにやってんだお前ら」

「なにつて、ご飯食べてたのよ」

「飯か、ならいいんだがよ、そういえば俺の・・・」

「んでさ、ちよつとお願いがあるんだけど」

「お願いって何だよ」

「お金が足りないからご飯代払ってくれない・・・？」

「なんで俺が払わないといけないんだよ！」

「お願い！一生のお願いだから！」

「まったく、俺はお前の一生のお願いを何回叶えてきたか・・・」

「すいません、これで」

「・・・つていつの間に俺のクレカ持つてんだよ！？つていうか払ってるし！？」

「はい2万6500クレジット、ちよつと頂きました」

「頂かなくていいから！つて全部それで払ったのかよ！？」

「ありがとうございました、またのご来店をお待ちしております」

「ええええええええ！？」

「ゴチになりました！」

ペコリとアタマを下げるゴスロリ少女とタバコに火を付け

一服している赤髪の青年に血の気が引いているニット帽の男の様子は街の人々が振り返り見るほどシュールな光景であった

「はあ・・・1万6500飛んじまったよったくよあ・・・」

「そう落ち込まないで、しばらくは使わないんだから」

「しばらくつて、お前らが使わなかったら金も飛ばなかっただろうがよ！」

「うつせえなあ、あんまり言うとお腹パンすつぞ」

「使わせたの誰だつつつてんだよ！」

「俺はコーヒーしか飲んでねえよ！こいつがバカみてえに頼んだからあんな風に」

「なんで止めなかったんだよ！」

「こいつが自分の分は払うつつたから信用したんだよ！」

「値段も見ずに払うバカがいるかよ！」

「はいはい、バカでごめんなさいね」

「過ぎたこと言っても仕方ねえしな・・・ったく今日はツイてねえよ・・・」

「んでお前さ、さっきなに言おうとしてたんだよ」

「そう、それなんだよ！皆聞いてくれよ！」

「なんだよ」「なになに？」

「俺のZが直ったんだよ！」

「・・・そう・・・」

「そうってなんだよ！そうって！もう少しリアクションしろよ！」

「・・・そう・・・」

「もういい！お前達は乗せてやらないからな！」

「別にいい、嫌々乗せられてまで乗りたくねえよ」

「私も同感」

「そうかい！そうかい！ならもう本当に乗せないからな！」

「いいよ、私のNSXに乘せるから」

「心配はご無用、AIカーで行くから」

「え！？あんなにボロカスに言ってたのに！？」「はあ！？ＡＩカー乗るのか！？」

「なんかどうでもよくなってきた、ＡＩカーに乗ったことないから記念に乗ってみようかと」

「んじゃ適当に呼んでみるか、ポンコツＡＩカーを」

赤髪の青年は車の乗り場のような場所に向かい、そこにあった器械にカードらしき物を入れた

「ようこそ、オート・トランスポート・システムです、車のタイプを選んでください」

「セダンで行くか」

「セダンですね、しばらくお待ちください」

しばらくするとセダン型のＡＩカーが３人の前に現れた

「んじゃこのＡＩカーに乗ってみるか」

「もうさ、こんなＡＩカーより俺のＺの方が・・・」

ニット帽の男が喋っていると赤髪の彼は勢い良くドアを閉めた

「おい！聞けよ俺の話を！」

「んだよおめえよお、タイミングが悪いんだよタイミングが」

「こんなクソ車より俺のZのほうに乗ったほうがいいんじゃないのかって言ったんだよ」

「ああ、丁重にお断りします」

「……もうしらねえからな！」

「ああ、ごめんごめんまた乗せてくれよな、お前のZ」

「それでいいんだよ、それで」

「「ようこそ、キャロットモーターズAIカーへ」」

「吹き込んでる声がババアすぎんだよなあ……」

「かなり旧型のAIカーみたいね、まあ仕方ないよ」

「旧型の奴か……不安になってきたな……」

「でも音声操作には対応してるみたいだよ」

「そういえば、このAIカーの製造元、キャロットモーターズって言ったよな？」

「うん、それで？」

「お前の父親の働いてる所じゃねえかよ」

「そうよ、それがどうかしたの？」

「あのなあ・・・お前の父親に伝えておいてくれよ」

「何て？」

「「こんなクソ車を世に出すんじゃないねえ」って」

「クソ車って・・・もっとオブラートに包んで伝えておくわ」

「だからそんなやつよりZの方が・・・」

「「行き先をどうぞ」」

「「ここから一番近い海辺に連れて行ってくれ」

「「かしこまりました、到着まで快適なドライブをお楽しみください」」

「んじゃちよっくら行ってくるわ、「快適なドライブ」ってやつに」

彼はそう言い残し、A Iカーは目的地に向かって走り出した

「はあ、どうすんだよ俺達」

「どうしよつか、支部に挨拶しに行く？」

「そうすっかなあ・・・あ、お前のNSXの停めてあった場所に俺のZ置いてるから」

「了解、それじゃ行こっか」

「ああ、了解」

ブログ エイリアン編 その4（後書き）

という風な感じでエイリアン編終了です

なんとか暇を見つけて書いていたらこんなに時間がかかってしまいました・・・

本編書けるのは受験が終わってからなので、しばらく間が開きます。
ご了承ください。クレジットの単位は1クレジットあたり一円と
思ってくださいw
それじゃ！ノシ

第一話 脱走

第一話 脱走

「速報です。ロサンゼルス刑務所から約50人が脱走しました。脱走を指示した人物は、

アリゲーター・フェデレーションの構成員と見られています」

「はあ、まったく最近こんなニュースばっか、なにか刺激はないの！？」

そうため息をつき、腕時計に内蔵されているテレビで流れたニュース速報を見ながら

語るのはエクストライバー東京支部所属の榊野理沙。

「そもそも、ここ半年で5回も脱走劇があるなんて・・・刑務所はなんのためにあるのよ！」

「まあまあ、アリゲーターも勢力を拡大してるから、見落とす可能性もあると思うんだけど・・・」

理沙をなだめるのは、同じ東京支部所属の遠藤ローナ。彼女もテレビを見ていた。

「だけど、見落とすすぎじゃない！？おかしいわよ！きっと警察もなにか裏があるんだわ！」

「それはないんじゃないか、ここ図書館だからあんまり大

声出さないほうが・・・」

そんなやりとりをしていたら、テレビを見ていた腕時計から表示が切り替わり、画面に女性が現れる。

「あなたたち、テレビ見てた？今後とんでもないことが起こるわよ・・・」

その女性は、ニナ・アンナ・サンダー。東京支部のオペレーターである。彼女も数年前までエクストライバーであった。

「見てたわよ！とんでもないことつてなによ！」

「本当に見てた？脱走者の中の一人の名前を聞いた？」

「それは見てなかったけど・・・」

「昔、私とレイが捕まえたバカなオペレーターが一人脱走したのよ」

そのバカなオペレーターと言うのは、ニナがエクストライバーだった、数年前に捕まえた当麻という人物だった。

彼は自分のプログラムをエクストライバーの幹部たちに却下され

復讐にAIラジコンカーや装甲車などを使いニナ達を翻弄し続けていたが、ニナたちの作戦が成功し逮捕された人物である。

「前もその事自慢げに話してたけど、そいつがなんでとんでもないことをする必要があるのよ」

「たぶん、私達に復讐すると思う。あの自律走行システムも相当高度なものだから、それも使ってくると思うわ」

「そういう事情があるから、今日から新しく3人配属されるわよ」

「え！？配属！？3人も！？」

第二話 二つのAI（前書き）

当麻の制作した自律航行システムの設定は参考にする資料がなかったので、自分で考えました。ご了承ください。

第二話 二つのAI

「え！？配属！？3人も！？」

驚いた理沙とローナは声を揃えて言った

「さすがに今のままじゃ対処できないこともあるかもしれないから、3人配属させたわ」

その一言に理沙が怒った

「ふざけんじゃないわよ！ついこないだ生意気なお子様が配属したのにまた追加！？おかしいわよ！」

「それじゃあもし当麻たちが4台も5台も暴走車を送り出したら？あなた達はどうするの？」

「それはその時考えればいいじゃない！そんなこといつ起こるのよ！」

その言葉に二ナが言った。

「その時考えるのはもう遅いの！奴らはもう考えをだしてるの！今対処するしかないじゃない！」

それに怖気ついた理沙はしぶしぶながらも納得する。

「それはそうだけど・・・」

「というわけで、3人はいつてくるから、あと研修生も一人入ってくるわよ」

理沙が困惑した顔で反応する。

「けっ・・・研修生も？」

「そうよ、ほかの支部はほとんど入っているわ、だけどうちの支部は余裕がなかったから最後まで入れなかったけど、今回3人はいつてくるから余裕ができたのよ」

「それじゃ、切るわよ。また連絡するわ」

「そんなぁ・・・」

そんな理沙にローナが語りかける。

「でもいいじゃない、にぎやかになるんだし。大勢のほうが楽しいわよ、きつと」

「こんなのどこがいいのよ！大体、ここ半年で何人増えたのよ！？あたし達が力不足って言うてるようなものよ！？」

理沙が絶望しながら言う。それはそうだ、つい最近まで2人なの
3人、そして7人に

なるのは、自分達に力がないといわれているのと同じと捕らえるのは間違えではない。

「でも、ニナさんが行っていた通り、4台や5台、暴走車が出てき

たら私達じゃ対処できないし・・・」

「そもそも4台や5台暴走車がどう出てくるのよ！偶然でもありえないじゃない！」

「二ナさんが言っていた当麻っていう人がかなり高度な自律航行システムを作っていたらしいの」

「それがどうしたのよ？」

ローナが近くにあったパソコンにメモリーを挿し、あるサイトを表示させながら説明する

「これを見て」

理沙が難しそうな顔をしてローナが指を指したところを見る

「とーまおーとぱいとつとすてむ？なにこれ？」

「Toma Autopilot System、当麻が作った自律航行システムよ。このサイトではそれがダウンロードできるの」

「これが高度な自律航行システム？ただのフリーソフトじゃない」

「これを設定させたAIカーは2つAIがあるからひとつ暴走しても、もうひとつのAIが機能するから、暴走することはめったにないの。これを作るのはかなり高度よ」

「そんなの作るの簡単じゃない。2つAIくつつけるだけでしょ？」

「簡単に言っけど、意外と難しいのよ。普通に走らせるなら2つのAIの考えを一緒にしなきゃだめでしょ？」

「そういわればそうだね、けどなんでそんな安全なシステムで暴走ができるの？」

「それは、事前に暴走に似せたプログラミングをして暴走の真似事をさせているの。」

「真似事？んじゃどうやって止めるのよ」

それを聞いたローナが深刻な顔で語った。

「止めるのが難しいのよ。さっきも言っただけど、2つAIがあるから、2つのAIを止めないといけないんだけど、従来の暴走の止め方じゃ止められないの」

「確かに考えてみればそうね、んじゃどうやって止めるの？」

「少なくとも内部をハックしないといけないけど、そのやり方は分からないわ・・・」

「え！？それじゃあどう止めるのよ!？」

「そのとき次第になるわね・・・今度はいつてくる3人がその道に詳しくたらいいいけど・・・」

「あーもうどうしたらいいのよ!!--!!」

第三話 研修生

「あーもうどうしたらいいのよ!!!!!!」

理沙が嘆くのも無理はない、今後出てくる暴走車は、ほぼ暴走を止めることが不可能な可能性がでてきてるからだ。

「そろそろ学校の完全下校時間過ぎるから、本部に帰ろうかなあ、理沙はどうするの？」

「あたしも帰るー、もうこんな時間まで学校居たの久々よ、いろいろ疲れた・・・」

「それじゃ、一緒に帰りましょう」

「りょうかい」

そして、時間はしばらくたち、理沙とローナが本部に着くとすぐにミーティングが行われた。

理由はやっぱり「あの」ことだ。

「そういうわけでミーティングを始める。今回話したいことはニュースでもやっていたが、アリゲーター・フェデレーションが勢力を拡大しつつある。そのアリゲーターに厄介な奴が入ってきた。」

そう語るのはエクストライバー東京支部の隊長、宗方圭。

「その厄介な奴とは、昔の部下だった当麻という奴だ。奴が制作し

た自律航行システムは、今ではA Iカーにも搭載されている、だが・
・・」

その話を止めるように理沙が質問をしてきた。

「ちょっと待つて、その自律航行システムは幹部達に却下されたんじゃないの？それで当麻がつかまった原因にもなったんじゃないの？」

「それがだな・・・ちょっとした裏技で採用されたんだ、奴のコネをつかってな」

「コネってなによ？」

「実はだな・・・まだ噂話程度の事なんだが、総括本部の中の人間がアリゲーターのスパイとして、活動しているらしい」

「え！？なにそれ！？」

理沙は驚きを隠せない。

「建前上は高度な自律航行システムとして再評価を受けたとなっているが、実際のところはエクストライバーを排除するために採用されたらしい。あくまでも噂だな」

理沙が机をたたいた後、立ち上がってこう言った。

「なによそれ・・・ふざけんじゃないわよ！あたし達を潰そうってそうはいかないんだから！」

「理沙、ちよつと落ち着いて」

ローナがなだめるが、理沙は落ち着かない様子。

「あくまでも噂と言ってるだろ。これ以上の内容は出ていない、あくまでも可能性は少ない。」

「なんでよ・・・おかしいじゃない・・・こんなこと・・・」

そんなときある少年が遅れてミーティングルームに入ってきた。

「遅れてすいません！7の整備してたらこんな時間に・・・」

そう急いで入ってきた少年の名は菅野走一、彼も東京支部のメンバーである

つい3ヶ月前に配属されたばかりで、弱冠12歳だが、ドライビングテクニクはトップクラス、飛び級もしている少年だ。

だがそんな走一を理沙は気に食わないという。確かに走一には少し自意識過剰なところもあるが、理沙はドライビングテクニクでの嫉妬が多いらしい。

「どういう顔して入ってきてんのよ！早く座りなさいよ！」

「うつせえな！お前に言われる筋合いはねえよ！」

「なによお子様の癖に！生意気だわね！」

「落ち着いて理沙、まだミーティング中よ！」

早速いつもの通り口論が始まるが、二ナが発した次の話題で一転する。

「そういえば、あなた達にも言ったけど、今日から研修生が入ってきたわよ。さあ入ってきて。」

ウィインという自動ドアの音とともにミーティングルームに顔を赤らめながら入ってくる人物。

「紹介するわね、新しく入ってきた研修生。吉田麻里香さんよ」

「はっ・・・はっ・・・はじめまして、吉田麻里香です・・・よつ、よろしくおねがいします」

小く中学生と思われるその容姿に、いわゆるロリボイスと言われるのか、その震えた甘い声がミーティングルーム中に広がる。

「あなた達も自己紹介して」

そう二ナが言うのと3人は自己紹介を始めた。

「遠藤ローナです。よろしくおねがいします」

「榊野、榊野理沙よ」

「ぼっ・・・僕、菅野走一です。よろしくおねがいします」

走一が自己紹介をしたあと、理沙が挑発気味にこう言った。

「僕う？あんたずいぶん前もそういつてたわね？なにいい子ちゃんぶってるのよ！？」

「うっ、うるせえなあ！誰だって初対面だと緊張するだろ！？」

「緊張？いつも生意気言ってるあんたが？あんた、また下着盗んだりしないでしょうね！？」

そう理沙が言った瞬間、緊張で赤くなっていた麻里香の顔がさらに赤くなる。

「あっ、あれは誤解だっていつてるだろ！？麻里香さんの顔を見てみるよ！そんなこと言っただから反応に困ってるじゃないか！」

「あんたがあんなことしたからでしょ！？そりゃ誰だって恥ずかしいわよ！あんたはこの恥よ！」

「そっ、そこまで言うなよ！お前は俺より運転技術も下の癖によ！」

「なんだって！？生意気言っているとあとで痛い目合っつての分かってる癖に！」

そんな二人にローナが一喝する。

「落ち着いてよ！二人とも！反応に困ってるじゃない！」

「すみません・・・私のせいでこんな口論させてしまって・・・本当にすみません・・・」

麻里香はうつすら涙を浮かべながら言った。

「大丈夫よ大丈夫、こんなこといつものことだから」

理沙があせりながら反応する。

「もうどうすんだよ！早速泣かして！全部お前の性だからな！」

「なによ！あんたがあんな紹介したからじゃない！」

「二人ともいいかげんにして！」

「全部お前のせいだからな！」

「違う！全部あんたのせいよ！」

見かねた二ナが麻里香に言った。

「麻里香さんごめんね、あの二人はほぼ毎日こういう言い争いしてるの、あの二人はほつといて、一緒に基地の案内をするわね」

次回に続く……

第四話 出勤

「麻里香さんごめんね、あの二人はほぼ毎日こういう言い争いしてるの、あの二人はほつといて、一緒に基地の案内をするわね」

二ナがそういうと、麻里香は二ナとともに震えながらミーティングルームをあとにしようとした。

するとローナがこういった

「ちょっとまってください、私も行きます」

「わかったわ、それじゃついてきて」

理沙と走一はまだ口論していた

「お前が全部わるいんだぞ！」

「何回言うのよ！もう一回言っけどあんたが全部悪いんだからね！」

そんな二人は放っておき、ローナは二ナ達と共に基地の案内をする。

「すいません・・・私のせいで・・・グスン・・・」

麻里香はひたすら謝り続ける。

「あなたのせいじゃないよ、理沙と走一君はいつもあんな感じだから、だから泣かないで」

ローナがなだめると麻里香はこう反応した

「そうなんですか・・・分かりました・・・」

そう言つて麻里香は涙を拭う。

「あなた、優しい子なのね」

二ナが微笑みながら言った。

「そんなことないですよ。さっきのは明らかに私が悪いですし・・・」

「いいえ、あなたは普通に自己紹介しただけじゃない。どこが悪いのよ」

「それはそうですけど・・・」

そんな会話をしていたら案内する最初の目的の場所に着いた。目の前にはアスファルトの道が広がっていた。

「ここがサーキットよ。ここぐらいの大規模のサーキットはほとんどないと思うわ」

「あと、この施設を囲んでる大きい道があるでしょ？それがオーバーコースよ。」

「こ・・・ここで走ったりするんですか・・・?」

「当たり前じゃない。サーキットは走るためにあるのよ」

「わっ・・・わかってますよ・・・ただ凄過ぎて私なんかがここを走っていいのかと・・・」

「そんなこと言ってるのも今のうちよ、練習で飽きるほど走ると思うから」

「はっ・・・はい・・・」

するとニナが車のキーを麻里香に差し出してこう言った。

「一回走ってみる？あなたの車、用意したわよ」

「わっ・・・わっ・・・私のくるま・・・？」

「そうよ、あなたの車よ。ガレージにあるから見ってみる？」

「は・・・はい！」

ガレージに移動したあと、ニナがオレンジ色の作業服を着た男に声を掛けた。

「ねえ、この子の車見せてあげてくれない？」

「はい、わかりました！ちょっと待っていてくださいね」

そついうと男は走ってどこかにいってしまった。

「さっきの人は誰ですか？」

「あの人は整備士の小川さん。あの人になにか車のことで困ったことがあったら聞いたら、
ほとんどのことなら答えてくれると思うわ」

「そうなんですか、分かりました」

その直後小川が走りながら戻ってきた。

「今からガレージ開けますね」

そう言い小川はガレージのシャッターを開けた。ガレージの電気をつけたあと、小川は麻里香に質問した。

「質問なんだけど君、なんて名前？」

「吉田麻里香です。よろしくおねがいします」

「吉田麻里香ちゃんか、名前で呼んでもいいかな？」

「はい、全然いいですよ」

「んじゃ麻里香ちゃん、また質問なんだけど、180SXには乗ったことある？」

「いや、180以前にFRには数えるぐらいしか乗ったことが・・・」

ローナが驚いた顔で一言

「え！？それじゃあ、以前は何に乗ってたの？」

「ついこないだまで、シビックに乗っていたのですが、練習場の借り物だったので・・・」

小川が困惑した表情で苦笑いしながら言った。

「そうかぁ・・・FFの車は今、ここにはないからなぁ」

そんな会話をしていたら、いきなりローナの腕時計から着信音が流れた。

「ピンコン、ピンコン」

相手は宗方からだった

「お前たち、ついに暴走車がくるぞ・・・」

ローナは驚きを隠せない様子

「え！？どういうことなの、おじいさま!？」

「先ほどアリゲーターから電話が来た。あと5分で暴走車を出すと
な」

その直後理沙と走一がガレージに現れた

「ついにきたわね・・・このときが・・・」

理沙が発したその言葉に走一が反応する

「どついつことだよ!?!このときつてなんだよ!?!」

「まあいつかわかるわよ、最善をつくすのみだわ」

「ふざけんなよ!どついつことだよ!」

「そんなこと言ってる前にとりあえず車に乗りなさいよ!」

「わかったよ・・・」

三人が各自の車に乗り込む。理沙は青のランチア・ストラトス、ローナは白に緑と黒のラインが入ったロータス・ヨーロッパ・スペシャル、走一は黄色のケータラム・スーパースェブンに乗り込んだ

「みんな、エンジンはかけたか?」

三人がうなずき、小川はイヤーマフを耳に掛けスタートの合図を出した

「よし、行け!」

次回につづく・・・

第五話 盗聴

「よし、行け！」

小川の合図で三人はアクセルを踏んだ。エンジンの轟音が基地内にこだまする

「す．．．すごいですね．．．」

啞然とした麻里香は呆気にとられていた

「すごいですね．．．これぞエクストライバーっていう感じですね！ニナさん！．．．あれ？ニナさん？」

麻里香の横にいたはずのニナもどこかへ行ってしまった様子である

「はあ、もうニナさんも管理棟に行ってしまったかあ、私もなにかしたいけどまだ見習いだもんなあ．．．」

落ち込んだ様子の麻里香に小川が呼びかける

「おい、麻里香ちゃん、この車のセッティングしてみるー？」

その言葉に麻里香ははいと言いながら笑顔で走っていった

一方そのころの三人は．．．

「無理だつて……」

聞き取れるかどうかギリギリな声で理沙がつぶやいた

「どうしたの？理沙？」

「どうせ止められないんでしょ？とーまおーと何とか何か使つてんでしょ……無理だつて……」

「そう落ち込むなよ、理沙、やってみないとわかんねんだからさ」

「あたしたちじゃ無理だつて……どうせバッテリー切れになるまで走らなきゃいけないのよ……」

そんな理沙の言葉を聴いていた何者かがこう発した

「まったくさあ、こんな弱気なエクストライバーいるかよ？なあおもわねえか？」

「まあそうね……つてなにあんた盗聴してんのよ！」

「うつせえなあ！盗聴じゃねえよ！ちゃんとエクストライバーの無線で聞いているんだからよお！」

何者かが会話しているのは理沙たちには筒抜けだった。

「聞こえてるわよ……あんたたちの会話……」

「え……？」

「楽しいわよね・・・私が落ち込んできると聞こえてたら・・・」

「え、もしかして聞こえてた・・・？」

「あんたたちエクストライバーなのはわかんないけど、私たちが止められないのバカにしてるわけ！？」

「いや・・・バカにはしてねえよ？ただそんなに弱気にならなくていいかと思っただけ・・・」

「どうせバカにしてるんでしょ！？私たちだって止めたいわよ・・・でも・・・うつ・・・うつ・・・」

「理沙・・・」

理沙は何者かに激怒した後、怒りのあまり泣いてしまった

「いや・・・なんていうか・・・ごめん・・・」

「俺たちがそれ止めるからさ、許してくれよなあ、頼むよあ」

その一言にローナが反応する

「あなたたち、エクストライバーなの？」

「ああ、まあ一応な」

「私の名前は遠藤ローナ、あなたたちの名前は？」

「そっちに着いたら言う。それまではいえねえ」

「あんた！？すいません、私が言います。私の名前は……」

何者かの会話を遮るようにローナが言う

「わかったわ、それじゃ位置はわかるよね？」

「ああ、わかる。ナビも付いてるし」

「んじゃ音声切るわ、あんたたちは黙って俺たちのドライビング、よく見とけよー」

そう何者かが言った後、無線の音声は切られた

「あんた、本当に最低ね、人間のクズとしかいいようがないわ、あとであの人たちにどう謝ろう……」

「そうでもしなきゃ、俺の出る幕無いしなー、でもお前にも責任あるんだからな」

「はあ！？なんであたしに責任があるのよ!？」

「そりやお前も少しは便乗したんだからさ」

「あれは無意識にやったものだし……」

「んじゃ行くか、お前も付いてこいよー」

「分かってるから、早く行って!」

「了解！あ、やっべえ！二トロの補充忘れてた・・・」

「そんなことどうでもいいから早くしなさいよ！」

「わかったから！だからバンパー当てんなよ！んじゃ行くぞ」

そう言う二人は暗いパーキングらしき所から車を発進させた

次回につづく・・・

第六話 最初の暴走（前書き）

投稿遅れてすみません・・・orz

理由はいろいろと忙しくて、手に付けられなかった+

書いたけど投稿する時間がなかったという感じですorz

楽しみにしていただいてた皆様には申し訳ない気持ちでいっぱいです・・・

第六話 最初の暴走

「本当に来てくれるのかしら……」

ローナはため息をつきながらいった。ローナには先ほどのエクストライバーが本当に来てくれるのが疑わしい

その前に彼らがエクストライバーなのかも疑わしいところだが、彼らを信じなければいけない

その後沈黙が続いた。5分ぐらいの沈黙だったが、ローナたちには永遠にも感じられるほどの沈黙に思えた

最初は理沙の泣き声がしていたが、途中で聞こえなくなってしまった

だが、以外にもその沈黙を破ったのは理沙だった

「私はもう大丈夫。やつぱりあいつらに任せたらだめだと思う、私たちが止めれると思うから……」

「さつきとは随分対照的な言葉だな」

「うるさいわね、あんなやつらに私たちの面子をつぶされたらたまったもんじゃないからよ」

「んで、あんたはあいつらのことをどう思ってるのよ」

「あいつらっていうか、男の人は結構口が悪かったと思う、女の人にはあんまり言っただけだったと思うぞ」

「あの女も女よ！私たちが聞いてないと思って便乗して！丸聞こえって分かった瞬間にいきなりこび始めてさ！」

「便乗じゃなくて相槌だとおもっただけだなあ、理沙の勘違いじゃねえか？」

「うるさいわね！あれも立派な便乗なのよ！」

「はあ？「それはそうね」っていっただけでそんなにキレる人間なんて、どこ探してもお前くらいだよ！」

「なんですって！？あんたいい加減にしないと後で・・・」

走一と理沙の口喧嘩を止めるように二ナが言った

「口喧嘩する暇があったらさっさと止めにいきなさい、立場を取られたくないんでしょ？」

「あーもう！うるさいわね！わかったわよ！止めればいいんでしょ！？」

「ローナ！早くあの暴走車止めるわよ！」

「俺たちじゃ無理だってさっき言ってたんじゃねえか、もう諦めろよ」

「やってみないとわかんないでしょ！？二ナ！暴走車の位置はどこ？」

「ルート53を右方向に曲がってるわ、もうすぐで着くわよ」

「OK！わかったわ！あんたたち私に付いてきて！」

「はあ、まったく理沙は・・・」

そんな会話をしていたら、暴走車がすでに目の前に現れていた

「理沙、走一君、フォーメーション」で行くわよ」

「了解！」

理沙が暴走車の前に行き、円盤状のものをAエーカーのボンネットにくっ付けた

そうすると煙幕のように煙が出て、その煙がAエーカーの周りを覆う

煙が消えると、ネット状のものがAエーカーにまとわりついている。

「これでレーダーは使えない！次行くわよ！」

その後、理沙のストラトスとローナのヨーロッパが暴走車を挟むように移動する

そうすると、走一がAエーカーのバンパー部分に付いている二つセンサーに向かって銃を向ける

パン！パン！銃声が二回響く

走一はセンサーに向かって銃を撃った

センサーにははき捨てたガムのような粘着性の物質がくっ付けられている

「よし！これで止まるはず！」

すると理沙が後ろに下がり、後ろの二つのセンサーを封じた

「キイイイイイイ」

AIカーが急ブレーキを掛け、止まろうとしている

「止まって！止まってちょうだい！」

とにかく、とにかく止まってほしい、理沙は必死に祈った

果たして暴走車は止まるのか……

次回につづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1191t/>

エクストライバー Gear

2011年11月16日10時50分発行